

新聞文章の平易化をめぐる若干の問題

園 田 次 郎

A、まえがき

新聞の紙面をやさしくするために、むずかしい漢字をできるだけ追放しようという考え方は、原敬が毎日新聞の社長時代に「漢字減少論」を提唱したのが最初の具体的な現われで、それは今から五十年前のことであるが、有力な新聞社が歩調をそろえて実行に移すようになったのは、そのうち二十年ほどたった大正十年ころからである。それ以来、単独で、または共同で漢字制限の研究をすすめ、紙面の平易化ということは新聞作製の上の重要課題の一つとなっていた。

しかし、新聞の大多数が、マス・コミュニケーションとしての新聞の機能を自覚して、本当に読みやすく、わかりやすい紙面をつくるために、できるだけ平易な用語で記事を書くようになったのは、終戦を経て、昭和二十一年に制定された「現代かなづかい」と「当用漢字」を平易化の基準として採用してからである。

この新しい基準の採用は、新聞文章の上に一つの革命をもた

らしたともいえるもので、現在の新聞の紙面と、それ以前のものとを較べると、ヴォキャブラリーにも、文章のスタイルにも著しい変化が見出されることは否定できない。といっても、この仕事はまだやっと四年半の経験を積んだばかりで、新聞文章が本当に良くなるのはこれからである。

私は、新聞文章の平易化をめぐる若干の問題を取上げることとしたが、始めに次の二つの点を明らかにしておきたい。第一は、新聞文章の問題も國語政策とつながるものであることはいうまでもないことで、常にその視野から論じられねばならないけれども、ここでは抽象的な理論でなしに、新聞をつくる仕事と取りくんでいる新聞人の具体的な実証的なりポイントを提供するだけにとどめたこと、第二は、データを正確につかうためと、問題の焦点をはっきりさせるために、例証のよりどころを私の勤務している朝日新聞だけに局限したことである。

B、平易化の現状

(a) 当用漢字の採用

新聞文章の平易化をめぐる若干の問題

朝日新聞の記事の用語が当用漢字のワックの中で書かれるようになったのは、昭和二十一年十二月一日付からである。実施するについての基本方針としては

一、漢字とかなの混ぜ書き、例えば

動き(悸)さん(傘)下

のような書き方は特別の文字の外はやらない。

二、制限字の言いかえに難澁するときは、同義語を考えることだけにこだわらないで、文章の組立てを変え、ことを工夫する。

という二つの原則を示し、新聞記事によく出る用語で、制限字の混ったものを平易な用語に言いかえるサンプルを小冊子にして参考に資する方法なども取った。このとき、編集同責任者によって特に強調されたことは、平易化は原稿の鉛筆を取る最初の出稿者から始まらなければならないということであった。原稿の筆者が難字の追放にルーズであれば、これを修正する負担は、筆者の所属する政治部なり社会部なりのデスクの肩にのしかかり、もしデスクが見のがせば、さらに整理部、校閲部に影響を及ぼすことになるので、先ず最初の原稿が平易化に厳正であるようにとの注意が呼び起されたのである。このことは現在でも繰返して強調されていることはいうまでもない。

当用漢字を採用することに決ってから実施するまでの準備期間が極めて短かかったので、指導や訓練はあつたらしい中に行われたが、予想されたほどの混乱はほとんど起きずに済んだし、これというみっともない失策もなしに切り替えを行うこと

ができた。

幾つかの関門の厳しい監視の眼をくぐりながら、それでも「禁制の文字」が紙面に現われることは否定するわけにはいかない。(ここにいう禁制の文字とは、固有名詞、声明書などの用語、依頼原稿の中の特殊な文字などを除外して、記者によって書かれた原稿の中の制限字を指すのである。)これに対しては、新聞用語改善委員会が週毎に丹念に統計を取って関係の部門の参考に資しているが、これをさらに半年毎に集計した統計を見れば、制限字の数は、字種も出度数もだんだんに減って来ていることはいうまでもない。これは、経験を重ねるにつれて、出稿者も編集者も平易化の運用を身につけて来たことを示すものである。

言いかえの文字に行き詰ったときは、問題の文字そのものにこだわらないで文章の組立てに工夫するということは実施に際しての指導方針として掲げたのであるが、このことを別な角度からいえば、ただむずかしい文字を追放しただけでは読みやすい、解りやすい文章にならない場合があり、こんなときは、コンポジションを考えなおすところまで進まなければ本当の平易化にはならないということがいえるのである。本文の冒頭で、平易化の実践は新聞文章に一つの革命をもたらしたといったのはこのことに結びついている。やさしい用語を素直に組立てて行きとどいた内容を盛り、しかも読む人に魅力を感じさせるようなスタイルこそ今後の新聞文章のありかたであろう。このことについては後でまた触れてみたいと思う。

(b) 現代かなづかい

現代かなづかいの採用は当用漢字よりもちょっと早く昭和二十一年十月二十日付の紙面から実行に移した。

このときも、現代かなづかいの通則を解説した小冊子を配布し、新聞文章に常に使われる用語の新かなづかいへの直し方を例証的に説明して啓発運動を展開した。特に、「ず」と「つ」、「じ」と「ぢ」の使い分け、「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」「ユ」列の長音の表記法、「ウ」列、「オ」列のヨウ音（拗音）の書き方などについて正しい指導を與えることに注意を拂った。

この轉換も、あまり混乱なしにすべり出したけれども、最初のあいだは、筆者の「書き慣れ」と編集者の「見慣れ」のエリアによって、「おぢさん」、「腕づく」、「帰らう」などの誤記がゲラ刷りまで通り、校閲部員が氣がついて朱を入れるようなことも避けられなかった。現在ではこんな誤記は原稿にもほとんど出て來ないほど各人が現代かなづかいを身につけて來たといふことができる。

(c) 句切り符号と小文字書きその他

朝日新聞では、昨年の七月一日付から、全紙面の記事に句読点つけとヨウ音（拗音）、促音の小文字書きを実施している。これもまた読みやすさと解りやすさを助ける上に非常に役立っていることはいうまでもない。

新聞文章は、読点だけで切つて句点なしに書きつづけていく特殊の型を長いあいだ固執して今に及んでいる。これは名詞切れの書き方を多く用いる新聞文章の性格から生れたものと思われなければならない、文章に句切り符号がないのは明らかに不完全であつて、これが読みにくさ、読みちがいのものになつてゐることは否定できないという結論に達したので、この数十年來の型を破つて、新聞文章を文章の本來の姿に置きかえることにしたのである。これをやるようになってから、文章が引きしまつて簡潔になり、一センチンスが三百字も五百字もあるようならだらした文章は少くなつて來るような傾向にある。

促音、ヨウ音（拗音）の小文字書きも読みやすさを助ける上に少からず役立っている。例えば

もつとつて帰ろう

きゆうはりもみりようじの看板をかゝげ

という書き方と

もつとつて帰ろう

きゆう、はり、もみりようじの看板をかゝげ

という書き方を較べてみれば、だれにも直ぐ納得がいくであらう。かなを讀む場合、一つ一つのかなを拾つて讀むものではなく、かなの一群を言葉として讀むのであるから、視覚に訴える早さからいつても、ヨウ音、促音の小文字書きが読みやすさを助けることは多くの説明を要しないと思ふ。

なおもう一つ、新字体（いわゆる略字体）の活字の使用も平易化の一項目に加えていゝであらう。

C、実施前との比較

このような幾つかの方式に基いて、できるだけやさしく記事を書くように工夫しているので、実施以前に較べて現在の紙面が目立って読みよくなっていることは事実が明らかに示している。

ここで十年前、すなわち昭和十六年の五月の朝日新聞の縮刷版から例証に取上げてみよう。いうまでもなく、そのころは日支事変四年目で、戦局は拾収がつかないほど拡がり、米國との外交関係も今にも火が付きそうに緊迫し、國中が軍國主義一色に塗りつぶされていて、政府の声明や軍部の発表などにも、「志氣を鼓舞するために」ことさらに漢文調の莊重な字句をならべ、新聞もまた折角やっていた漢字制限などはすっかりかなくなり棄てたような有様であった。

五月九日付の夕刊社会面に

『加工しても、**闇**は、**闇**』の
見出しで價格等統制令によつて物
の値段が釘づけにされた結果、狡
猾な商人が加工賃とか運搬代とか
の名目で法外の値段につり上げて
暴利を貪るものが、最近頻發して
來た折柄、このほど大審院織田裁
判長は、余分の加工などによつて
公定價格を引上げたものは犯罪を

構成する旨を明かにし、その判決
要旨を新判例とした、惡徳商人に
對する頂門の一針として注目され
る

という記事が出ている。

「狡猾」とか「頻發」とかのむずかしい文字が入っているばかりでなく、「頂門の一針」という古めかしい成語まで出ていて決してやさしい記事とはいえない。ルビがついていても読みやすさにはほとんど役に立っていないようである。平易化の訓練を経た現在の記者なら例えれば次のような記事にするであらう。

價格等統制令で物價がくぎづけに
された結果、たちの悪い商人が加
工賃とか運搬代とかの名目で法外
に價格をつり上げて暴利をむさぼ
るものが最近目立って多くなつて
いる折から、このほど大審院織田
裁判長は、余分の加工などで以上
に賣ったものは法規に触れること
を明かにし、その判決要旨を新
判例とした。これは惡徳商人に対
する警告として注目されている。

次に政経記事を見てみよう。

五月三日付朝刊の第一面に

「物資の出荷統制強化」の見出しで海上輸送力の増強に資するため、政府はさきに海運中央統制輸送組合を結成せしめ、四月一日以降運賃の共同計算、共同配船などを實施してきてゐるが、右の配船の統制に對してこれに對應する物資の出荷統制の方は、いまだ完全に行はれるまでにいたらず、往々にして出荷計画との間に齟齬をきたすこともあり、今後の物動計畫を円滑に遂行してゆく上にも配船統制の強化に並行する重要物資の出荷統制が喫緊とされるにいたつた（後略）といふのである。

この記事も、「齟齬」などという不必要な難語を使っているだけでなく、文の構成が入りこんでいて読みにくくもあるし解りにくくもある。今だったら次のような書き方をするのが普通である。

政府は海上輸送力の増強をはかるために海運中央統制輸送組合をつくらせて、四月一日以降、運賃の共同計算や共同配船などを行わせて来たが、配船統制に對應する物

資の出荷統制の方はまだ不完全で、出荷計画との食いちがいが起きるような場合もあるので、今後の物動計畫を円滑に進めるために、配船統制の強化と並行して重要物資の出荷統制が急を要する問題となつて来た。

社説もまたかなりスタイルが變つて來ている。

終戦前は、社説は一般の読者にはむずかしくて取りつきにくいものとして敬遠されがちであつた。

五月二十日付の「國民保健と醫療の普及」と題した社説の前段を取り上げて見よう。

國民体位の向上は刻下の急務であるにも拘らず、その根本條件たる醫療施設がなほ十分に普及してゐないために、極めて遺憾な實狀が隨所に訴へられてゐるのである。わが國醫學の水準は列國に比して、毫も遜色なしといはれ、醫學博士の數も一萬數千人に達する上に、ほとんど毎日幾人かづつ増して行きつゝある一方において、統計は全國になほ三千三百余の無

醫村があり、およそ八百二十万人の人口が常設の醫療を自村内にもち得ない事情の下に生活してゐることを明示する。

厚生省当局はつとにこの点を考慮し、相当の時日を費して検討を重ねた結果、すでに一定の成案を發表するところあつたが、しかもなほその實現を見るにいたらないために、種々の難問が續出してゐるのである。最近にも帝都に接近した地域にさへ、無醫村があるといふ事實が、議論の對象とせられるにいたつたが、問題はむしろさう容易に都會と聯絡のとれない僻陲の無醫村の方に、一段と多かるべきこといふまでもない。

読んでみれば、内容はそれほどむずかしいことを書いてゐるのではないが、「毫も」、「遜色」、「僻陲」などの難字を取り入れてゐるばかりでなく、文語調がたくさん出て來るので、いかにも固苦しい親しみにくい感じを與えている。今の論說委員だったら、こんな肩を張つたようなものものしい書き方はしないで、例えば次のような調子で書くであらう。

國民体位の向上は目下の急務だと

いわれておりながら、その根本條件である醫療施設が十分にゆきわたっていないために、失態がいたるところに起きている。わが國の医学の水準は列國に較べて少しも劣つてはおらず、医学博士の數も一万余千人に達し、その上に毎日幾人かずつ増えているのに、一方では、全国になお三千三百余の無醫村があり、およそ八百二十万人が自分たちの村内に常設の醫療施設も持たない生活をつづけている事實が統計で示されている。

厚生省当局は早くからこの点を考慮し、相当の時日を費して検討を重ねた結果、すでに一つの成案を發表しているが、それがまだ実行に移されていないので種々の問題が起るのである。最近にも東京都に近接した地域にさへ無醫村があるという事實がわかつて論議的になつたが、それよりも、都會から離れた交通不便な無醫村の方にもっと多くの問題があることは

いうまでもない。

D、平易化の障害

新聞はどのようにして紙面の平易化をやっているかについて、以上の実態報告は極めてあらましの輪郭を示したが、それでは平易化の仕事はすっかり軌道に乗って安定しているかといえ、それはそう単純に言い切るわけにはいかない。

卒直にいうと、たくさんのむずかしい問題が、まだ解決されないままに平易化の仕事の周辺に立ちほだかっていることに目をそむけるわけにはいかない。このことは、私たちが毎日の新聞をつくっていくについてどうしても避けることの出来ない抵抗であって、それは当用漢字と現代かなづかいのもつ欠陥につながるものといえることができよう。このことはただ新聞だけが対決を迫られているというのではなく、わが國の國語政策の基本的な問題に関連をもっているのであるから、日本文化の共通の課題として究明されなければならないと思う。

(a) 当用漢字の欠陥

先ず当用漢字についていえば、一八五〇の文字が選定されたときは、原理と経験に基いて注意深く検討された結果であることは今さらいうまでもないことであるけれども、これを平易化の基準として取り入れた新聞の四年半の実践は、このワクの中で記事を書くには、常にいろいろの強い抵抗に突き当たって苦しんでいるという現実の事実を卒直に訴えなければならぬ。

いうまでもなく、新聞記事は、特殊の用語を多く要求する必要はもっていない。それにも拘らず、人々の生活に直結した社会現象を表現するのに当用漢字のワクに押し返されて行詰ることが少くない。具体的に述べてみよう。

公僕精神にめざめて

社会秩序の擾乱を企て

中労委の斡旋で

法曹界の一致した意見では

リバティー型の備船が許され

稼働率が高まり

融和の道は閉ざさないが宥和政策は絶対に取らない

彼こそ戦争挑発者だ

防諜政策を強化し

そんな分子は次第に淘汰され

時期尚早とする意向が強

共産軍の歩哨線を突破し

兵站線が切断され

爆弾と焼夷弾で

強行偵察を行い

素朴さを失わずに

神の恩寵

自己嫌悪に陥り

霧閉氣に支配されて

六十年の生涯をふり返って

新聞文章の平易化をめぐる若干の問題

軽蔑したような態度で

だんだん仙骨を帯びて来た

盲聾学校建設の豫算が可決された

亭主風を吹かして

「旦那さんも旦那さんだ」

家計の中で嗜好品の占める部分は

裁判沙汰にまでなってしまった

店頭は新年号雑誌の洪水だ

ひとりで妄想を描いて煩悶し

鐘乳洞が天然記念物に指定された。

などは日常の話し言葉にも、書き言葉にもしょっちゅう使われているので、新聞の記事に出て来る場合も高いのであるが、この中には制限漢字（▲印）を含んでいるので、新聞ではそのまま手放しには使えない。かな書きや混ぜ書きにしては正確さを欠くことがあるばかりではなく、言葉のニュアンスを失う恐れもあるし、といって、びったりとふさわしい代替語がないのである。

漢語脈の音よみの用語だけでなく、和語の訓よみの言葉にもこれに類するものが少くない。例えば

汁 窠 灯 瓜 誰 痲（濼） 匂い 嫌う

喚く 爺さん 睹ける 眺める 冴えた

などで、これらの文字は小説などにいつも出て来る用語であるだけに、文学者などがこれを使おうとするのを無理に抑制することに問題がないとはいえない。文学者の中には、このよう

な使い慣れた字をかな書きにしては語感が失われてしまうとい

って非常にきらう人が少くない。

学術用語、専門用語になると、抵抗度はさらに強い。学術用語、専門用語は、幅も広く、奥も深く複雑なので、一八五〇の当用漢字のワクの中に収まりきれないことは始めからわかってきたことであるけれども、その中で、人々の生活に身近なもので、従って新聞記事に出て来ることも多い用語は、どうしても平易化の前の抵抗線となっていることは避け難い。

例えていえば

農業の 灌漑▲ 土壌▲ 過燐酸▲ 誘蛾燈▲ 孵化器▲

育雛室▲ 泥炭地帯▲ 養兔▲ 養蜂▲ 暗渠▲

口腔▲ 喉頭癌▲ 頸椎骨▲ 胃經▲ 痔▲

法律の 騒擾▲ 毀棄▲ 勾留▲ 誣告▲ 誘拐▲ 恐

物理学の 楕円▲ 凹凸（レンズ、一面鏡）▲ 地殻▲

生物学の 燭光▲ 胚芽▲ 哺乳類▲ 蛋白質▲ 昆蟲▲ 藻▲

考古学の 繩紋式▲ 彌生式▲ 石斧▲ 洪積層▲

などはほんの一部分を取り上げただけである。こんな用語の入った記事を書く場合は、これらのテクニカル・タームそのものが記事の要素であるから、代替語をもって来るわけにはいかず、仕方なしにかなの混ぜ書きか片カナで書く手法を取る外はないのであるが、それでは意味が正しく伝わらないことが極めて多い。これらの用語については、現在それぞれの部門で整理

と平易化の調査研究が進められているので、その結果に大きな期待がもたれているが、それにはかなり長い時日がかかるであらう。

私自身の考えとしては、國語政策の上からいっても、常用の漢字の数はなるべく少いことが望ましいと思うし、従って、新聞が平易化の基準として当用漢字を採用したことは正しい態度であったと信じているが、それだからといって、当用漢字表のもつ欠陥までもひっくり返して肯定するわけにはいかない。今もって各方面からの強い風当りを受けている当用漢字を守っていくためにも、その欠陥をうずめて、反対者も支持者に変わらせるような、もっと完全な漢字表にすることを熱望せずにはおられない。いうまでもなく、文字は文化傳承のカギであるから、漢字の制限を急ぐあまり、却ってマイナスの影響を與えるようなことになっては、何のために制限するのかわからなくなるといえよう。当用漢字の処理に関して、現行の制度を一度解体し、新しい方法論で文字を選びなおすという主張が学者および文藝家の一部で論じられているが、それは日本の社会に、とりわけ義務教育の事業に大きな混乱をまき起す危険がひそんでいることを恐れないわけにはいかない。新聞が、四年半のあいだに体当りで取組んだ経験からいえば、現行の当用漢字表に若干の補正を加えることによって、一般の言語生活にさして不便のない、そして文化傳承のカギとしても一應事足りる條件を充たすことができるであらうと私は信じている。

(b) 現代かなづからの弱点

現代かなづかいが若い世代を旧かなづかいの首かせから解放した役割は大きなものである。ことさらにこれに目をそむけようとしている保守主義者はまだ今でも少くはないにしても、この方式を元に還せというような主張は、もはや時代に置き去りにされてしまふであらう。しかし、現代かなづかいもまた弱点をもっていて、その弱点が新聞の平易化にも影響を及ぼしていることは明らかにしておかなければならない。

弱点の第一は、現代かなづかいは原則として発音通りに表記するので、標準語が確立していない今の段階では、一つの事象が二通りにも三通りにも書かれることである。例えば、「ほゝえむ」と発音する人は書くときも「ほゝ」と書き、「ほおえむ」と発音する人は書くときも「ほお」である。このほか、「むずかしい」と「むつかしい」、「はい」と「はえ」、「たくわん」と「たくあん」、「しつこい」と「しつこい」、「かんづめ」と「くかんづめ」のように、書き方がまち／＼になっているものが少くない。これは言葉の混乱の因子の一つで、新聞にも同じ紙面に一つの事象が二通りの表記法で出るような不手際を演ずることにもなるのである。弱点の第二は、現代かなづかいが制定されたとき、摩擦を避けるための用意から、部分的に旧かなづかいに妥協した暫定弁法を設けたことが今でも機能障害を残していることである。二語連合の言葉の「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」の面倒な使い分けなどもその一つで、例えば鼻血は鼻の血であ

るから「はなじ」とは書かないで「はなぢ」と書き、手綱は手と綱の連合であるから「たずな」ではなくて「たづな」である。会社勤めは勤めであるから「かいしやつとめ」、三日月は月であるから「みかづき」である。もっと面倒な例は添乳は一語で「そえじ」であるが、貰い乳は二語連合で「もらいちち」である。三日月や鼻血を一つの言葉として受入れる子供たちにも、こんな変則の原理を理解させることは無理でもあるし困難でもある。

現代かたづけのこのような弱点も、わが國の混乱した國語の現状に結びついたものであるから、これだけを切離して解決できるものでないことはいうまでもないにしても、すぐれた文学者などが、國語を良いものに育て上げるといふ高遠な考え方に立ってその改善に進んで協力するならば、非常に大きな推進力になるであろうと私はひそかに思いつづけている。

E、新しい新聞文章の探究

(a) フレッシュ博士の研究

これまでの種々の調査によると、新聞を読むために費やされる時間は平均二十五分くらいが普通のものである。してみれば、新聞記事は、義務教育の教養を身につけた人ならだれでもすらくと読め、読んでいくうちに記事の内容が頭に入り、そして中途で投げ出す氣持にさせないだけの魅力をもつものではないれば、マス・コミュニケーションとしての機能を生かすことにはならない。

この要求に應ずるような新聞文章の新しいスタイルの探究こそ、現在の平易化の仕事に負わされている課題であるが、すでにアメリカでやっている新聞文章の科学的研究は、この困難な道程に立てられた一つの指標だといえよう。

この科学的研究は、新聞記事の実態を方法論に基いて分析し、それによって得られたデータを心理学的実験にかけ、もっとも適正な新聞文章はどのように書かるべきかを見極めようとするものである。それだけに、この研究から引出されるものは、具体的であり、そして客観性をもつものといふことができる。

その一つとしてフレッシュ方式を取上げてみよう。数年前、心理学者フレッシュ博士が、A・P通信の依頼を受けて、同社の記事の実態調査を行い、詳細なりポートを作製した。このリポートは極めて興味深く、そしていろ／＼の示唆に富んだものである。当時、A・Pの記事は一般に固くて読みにくいという批判の声が強かった。フレッシュ博士は、先ず同社の記事の実態分析を行って各種のデータをつくり、これを心理学的実験に移して、(1)たやすく興味をもって読める(2)やや読みにくい(3)かなり読みにくい(4)非常に読みにくいの四つの区分測定を試みた。そしてA・Pの記事は(3)と(4)の中間にあることを明らかにし、一般の批判が科学的実験によっても間違いでなかったことを具体的に実証した。

フレッシュ報告は、読者が興味をもって読む記事の条件として次のような項目を挙げている。

一、センテンスがあまり長過ぎてはいけない。(一センテンスの語数は一九語を越えないのがよい。)

二、スペリングの長い語がたくさん使われるのはよくない。

(一〇〇語あたりのシラブルの数は一五〇を越えてはいけない。)

三、人稱語の多い文章は興味を引く。(百語あたり少くとも六つくらいあるのがよい。)

四、読者にアピールするセンテンスがあることが必要である。(一〇〇センテンス中には少くとも十二くらいあった方がよい。)

A・P通信では、この報告を取入れて、この方式に基いた文章の平易化を実施しているが、現在の同社の記事は非常に親しみやすくなったといわれている。

(b) 朝日新聞で行った実態分析

朝日新聞では、フレッシュ報告に示唆を受けて、昭和二十三年に、新聞文章の実態分析を行う特別調査委員会をつくり、科学的研究のスタートを切った。

この調査は、一定期間に朝日新聞に出たニュース記事を分析して

一、字数と文節数

二、名詞・形容語・接続語との関係

三、主語と述語の関係

四、漢字とかなの比率

五、修飾語の性格

などの諸項目について正確なデータを出すことを主要な目的とした。このデータは次の機会に行なおうとしている心理学的実験、すなわちフレッシュ方式のような読解度の区分測定的基础資料となるものであるが、実態分析のデータからだけでも新聞文章の改善について種々の教訓が見出される。その詳細についてここで取上げることができないけれども、次のような諸点は特に重要な意味をもっていると思われる。

一、一センテンスあたりの平均は字数八六・一、文節数一八・八となっている。フレッシュ報告には一センテンス一九語

という数字が出ており、普通の常識に従って英語の一ワードを日本語四字に対比させると、朝日新聞のニュース記事は読みやすい標準よりもやや長過ぎることになる。

二、漢字とかなの関係は一センテンス平均で漢字四五・二字に対してかな三六・五字(ひらがな三一・三、片かな五・二)となっていて、かなは漢字に従属した関係におかれている。

三、一センテンスの中に主語が三つ以上もあるのはセンテンスが長くなり、そして読みやすさの妨げになることが多い。

四、主語と述語のバランスが取れていないのは読解を邪魔する。

五、修飾語は、体言を修飾する形容詞的なもの(連体修飾語)よりも、用言を修飾する副詞的なもの(連用修飾語)の方

が多く用いられている。すなわち、現在の新聞文章では、無意味な形容詞はだん／＼消えさつていくことがわかる。

F、む す び

新聞文章の平易化の現状をめぐる若干の問題を提起しただけで與えられた紙幅を費やしてしまったが、問題の性格がどんなものであるかについては一應明らかにしたと思う。これらの諸問題の検討と解決は、先にも述べたように、新聞だけに課せられていたものではなく、また新聞だけで成し遂げられるものではないので、わが國の國語政策の全体の構想の中で考えられなければならないと思ふ。

— 國語審議会委員 —